

# ザ・ピエール The Pierre

世界にはまだまだ日本人が訪れていないホテルがある。このコーナーではホテルエが知っておくべき「世界のリーディングホテル」を紹介する。これまで多くのホテル紹介本が出版されてきたが、そのほとんどが現地のホテルと事前に取材の連絡を取り合い、プロのカメラマンや通訳、そのほか大勢を連れ立っての大名取材であり、宿泊は省略といったことも多々であった。本連載では、著者自身が長年にわたる個人旅行中に自分の目で感じ取り、コメントを書き込み、自分のカメラで思いのままを撮ってきた写真を掲載する。

※本連載は毎月2・4週号掲載



セントラルパーク南端の広場「グランド・アーミー・プラザ」から俯瞰した「The Pierre」



アッパー・イーストサイドにある正面エントランス。残念ながら外壁工事中で美しい正面ファサードのお披露目はお預けだ



アールデコの装飾が美しいグランドロビー。左手にレセプション、右手にコンシェルジュデスクがある



筆者 小原康裕  
ホテルジャーナリスト。  
慶応義塾大学法学部法律学科卒。74年Munich Re入社。85年築地原健機代表取締役。2001年投資顧問会社原健設立、代表取締役CEO。JHRCA、日本ホテルレストランコンサルタント協会理事。  
※現在、著者のホームページで「世界のリーディングホテル」を連載中。多くの美しい写真と興味深いコメントで、世界中のホテルとそれら関連都市を紹介。  
www.jhrca.com/worldhotel



「トロンプ・ルイユ」[Trompe-l'oeil] (だまし絵)が描かれたエレガントなサロン、「ロタンダ」[The Rotunda]。1967年に米国人アーティストによって描かれ、ピエールを代表するシボリックなサロンだ



エントランスホールに置かれたガンダーラ美術の仏像



61丁目側にあるセカンド・エントランスの美しい門柱と銘板



「Le Caprice」のスタイリッシュなバー・カウンター



コンテンポラリー感覚の「Le Caprice」のメインダイニング・エリア



アフタヌーンティーも楽しめるバー・ラウンジ「Two E Bar/Lounge」



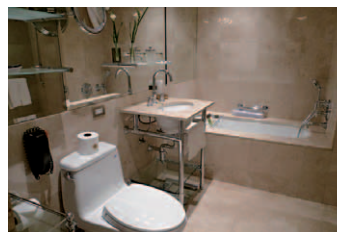
ホテル創成期の雰囲気が感じられる客室フロア中央にあるホール



「City View Suite, Twin Beds」スイートのツインベッドルーム。全体で74㎡の広さがあり、ピエールらしい個性的なベッドカバーが可愛らしく印象的だ



暖炉を備えたクラシカルな雰囲気のリビングルーム



総大理石で構成されたシンプル＆モダンなバスルーム

ニューヨークで“最もエレガントなホテル”として評価されて来たザ・ピエールは、現在インドホテル界の雄、タージホテルズ・リゾーツ&パレスの傘下に入り、「The Pierre, A Taj Hotel」の名称となっている。ピエールの創業者チャールズ・ピエール・カサラスコは弱冠25歳でアメリカに移民として渡り、父親のジャック・ピエールがモナコのホテルオーナーであった事からすぐさま事業の頭角を現した。パークアベニューでレストラン「Sherry's」の経営で大成功を収め、多くのパトロンを得て1930年に現在の地で「ザ・ピエール」を開業する。当時、「ニューヨークで最も美しい建物のモニュメントのひとつ」として賞賛され話題をさらった。あの「フランス料理の父」エスコフィエもゲストシェフとして招かれ、NYの上流階級のソサエティーに最高の料理を提供した。しかし1929年にアメリカを襲った世界大恐慌には勝てず、3年後にホテルは競売に掛けられてしまい、翌34年にはピエール自身も過労で他界してしまう。

その後の変遷を経て、59年にピエールの客室の一部はプライベート・レジデンスとして女優エリザベス・テイラーを含む個人資産家に売却されている。81年にピエールの営業はフォーシーズンズホテルズ&リゾーツに引き継がれその隆盛を取り戻した。記念すべきピエールの創業75周年に当たる2005年にはタージホテルズの傘下に入り、1億ドルを費やして大改装を断行し、49室のスイートを含む全189室のゲストルームを擁すホテルとして2010年に新装グランドオープンした。

ピエールと言えばトロンプ・ルイユ(だまし絵)が描かれたエレガントなサロン、「ロタンダ」[The Rotunda]は外せない。ロタンダとは円形の建物、円形の広間という意味を持ち、天井から壁面いっぱいには描かれた装飾は米国人アーティストのエドワード・メルカースにより1967年に制作された。この麗しきサロンで優雅にアフタヌーンティーを楽しむのがホテルの自慢であったが、現在この部屋は単なるホワイエとなってしまう以前の賑わいは残念ながら夢の中へ消えてしまった。同じくアッパー・イーストサイドの上流階級を顧客に持つピエールのメインダイニングも大きな変革を受けた。フォーシーズンズ傘下の時代は「Café Pierre」の名称で上品な雰囲気のフレンチダイニングであったが、タージホテルズ傘下に移行すると「Le Caprice」の名称となり、コンテンポラリーな雰囲気に転換された。そしてつい最近、あの伝説的レストラン「Le Cirque」の系譜を持つイタリアンダイニング「Cirio Ristorante」に改称して開業させている。

ピエールはセントラルパークに面したアッパー・イーストサイドの歴史的保全地区にあり、これ以上望めないほどの理想的な立地を誇っている。建物はクラシカルなヨーロッパの香りが漂い、華麗なアールデコの装飾が随所に施されている。館内エレベーターはNYで唯一専任のアテンダントが案内するシステムを残しており、歴史に培われた高いホスピタリティー意識を維持していると言える。